

# イイ波来てるね！南伊勢！

## ～空き家リノベーションコンテストを 活用した水産業の振興～

愛知学院大学法学部 小林明夫ゼミナール

代表者：田中利依

発表者・参加者：伊藤菜々美、大島晴留人、梶野歩夢、加藤まなか、川田早智子、  
小瀬古樹己、後藤いあん、榊原萌、鈴木もえ、田中利依、辻朝日、  
中山隼輔、成田彩乃、西佑太、二宮百可、不破啓貴、前多晴、  
前田憲太郎、松村美咲、村枝拓郎、山田涼佳、吉田光宏

### 梗概

我が国の漁業就業者数は一貫して減少傾向にあり、2020年には前年から6.3%減少して13万5,660人となっている。漁業就業者の総数が減少する中で、近年の新規漁業就業者数はおおむね2,000人程度で推移していたが、2019年は1,729人、2020年は1,707人と2年連続で1,700人台となり、2018年の1,943人と比較しても1割減少している。

また、南伊勢町においても、1971年度の水産業就業人口が5,011人であったのに対し、2018年度には774人まで減少している。2018年における年齢構成別水産業者の割合をみると、60歳代と70歳代以上を合わせて約50%を占めており、15歳から39歳までの比較的若い世代の割合は全体の16.7%に留まり、後継者不足に陥っている。このことにより、町の活力が失われてしまうことが懸念される。

他方、南伊勢町の空き家の状況をみると、2015年の空き家総数が893件であったのに対し、2021年には1,761件と900件近くも増加している。また、空き家の大多数が漁村の中に存在していることもこの地域の特徴である。

このような課題を解決するために、私たちは、空き家リノベーションコンテストを活用した水産業後継者育成の場の設立を提案する。町が空き家リノベーションコンテストを主催し、過疎化によって生じた空き家をリノベーションする。そして、水産業全体を活性化させるために、水産業に関することを学べる場を設立し、その活動のためにリノベーションした空き家を活用する。これにより、過疎によって生じた空き家をメリットとして活かすことができるほか、水産業の担い手不足の解消につなげることができる。また、単に空き家の引き取り相手を募集するよりもコンテストを開催することで、多くの人に活用することのできる空き家の存在を知ってもらうことができる。

## 第1章 はじめに

私たちは、今回のテーマである「地域の活力につながる産業の活性化」を考えるに当たり、水産業に着目した。南伊勢町の伝統的な基幹産業である水産業の振興を目標に、次代を担う人材を育成することで、担い手不足という課題を解決し、地域の活力につなげていくことのできる政策提言を行う。第2章では、漁業就業者の全国的傾向と南伊勢町についての現状分析を行う。第3章では、基本的な考え方として少子高齢化による水産業の後継者不足をどのように解決していくのかを述べる。第4章では、基本的な考え方に基づく具体的な政策として、空き家リノベーションコンテストの開催と水産業後継者育成の場の設立について提言するとともに、後継者育成事業に関し参考となる取組として、京都府の例を紹介する。そのうえで、空き家対策と水産業振興とのつながりについて述べる。また、今回の提案によって得られるメリットと課題について検討する。まとめの第5章では、今回の提案からみた今後の展望について述べる。

## 第2章 現状分析

### 第1節 漁業就業者の全国的推移

我が国の漁業就業者は一貫して減少傾向にあり、2020年には前年から6.3%減少して13万5,660人となっている。漁業就業者の総数が減少する中で、近年の新規漁業就業者数はおおむね2,000人程度で推移していたが、2019年は1,729人、2020年は1,707人と2年連続で1,700人台となり、2018年の1,943人と比較しても1割の減少となっている。しかしながら、新規漁業就業者のうちおおむね7割程度が39歳以下であり、若い世代の参入が多くを占める傾向が続いている<sup>1</sup>。

我が国の漁業経営体の大宗を占めるのは、家族を中心に漁業を営む漁家であり、このような漁家の後継者の主体となってきたのは漁家で生まれ育った子弟である。しかしながら、近年、生活や仕事に対する価値観の多様化により、漁家の子弟が必ずしも漁業に就業するとは限らなくなっている。他方、新規漁業就業者のうち、他の産業から新たに漁業に就業する人はおおむね7割を占めており、転職先として漁業に関心を持つ都市出身者も少なくない。こうした潜在的な就業希望者を後継者不足に悩む漁業経営体や地域とつなぎ、意欲のある漁業者を確保し担い手として育成していくことは、水産物の安定供給のみならず、漁業・漁村の多面的機能の発揮や地域の活性化の観点からも重要となる。

### 第2節 南伊勢町の現状

次に、南伊勢町の人口構造の変化と水産業就業人口、空き家バンクの利用件数についてみていきたい。

三重県の度会郡に位置する南伊勢町は、豊かな海と山、温暖な気候等の自然の恵みがあり、漁業では日本屈指の水揚げ量を誇り、人々の生活を支えてきた。

しかしながら、1965年に31,592人であった同町の人口は、2015年には12,788人、2020年には10,989人まで減少しており、過疎化が進んでいる<sup>2</sup>。その背景には年少人口（15歳

---

<sup>1</sup> 水産庁「令和3年度水産白書」（水産庁、2021年）

（<https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/R3/attach/pdf/220603-11.pdf>）（閲覧日2022年9月16日）

<sup>2</sup> 南伊勢町「数字でみる南伊勢町」（南伊勢町、2019年）及び総務省統計局「令和2年国勢調査」

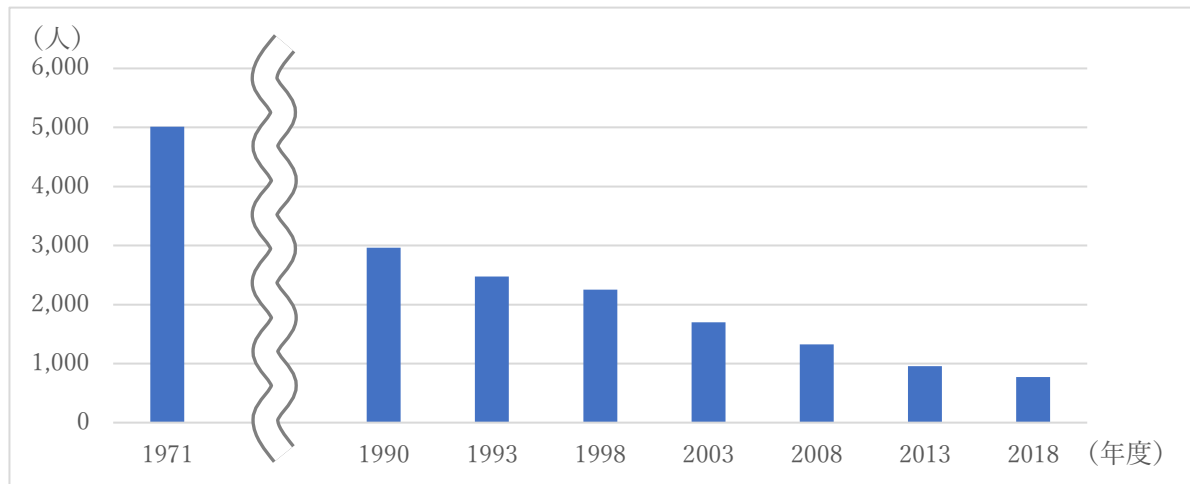
未満)の低下と老年人口(65歳以上)の増加がある。1980年に5,072人であった年少人口は2020年には648人に激減し、老年人口は3,393人から5,867人へと増加している。その結果、1980年に14.2%であった高齢化率は2020年には53.6%まで上昇した。53.6%という数値は、2020年の高齢化率の全国平均である28.8%を著しく上回り、限界集落に該当する高齢化率50%をすでに超えている<sup>3</sup>。そのため、生産年齢人口が減少し、水産業にも大きく影響が表れている。

水産業就業人口では、1971年度の就業人口が5,011人であったのに対し、2018年度には774人まで減少している<sup>4</sup>(図1参照)。2018年における年齢構成別水産業者の割合をみると、60歳代と70歳代以上を合わせて約50%を占めており、15歳から39歳までの比較的若い世代の割合は全体の16.7%に留まっている<sup>5</sup>(図2参照)。

また、過疎によって増え続ける空き家を有効活用するために、空き家の売却又は賃貸等を希望する所有者等から申込みを受けた情報を、空き家の利用を希望する者に対し紹介する空き家バンク制度が南伊勢町にも存在している。しかし、実際の運用実績をみると、空き家バンクの2015年度から2021年度までの登録件数が125件あったのに対し、成約件数は76件と約60%しか使われていない<sup>6</sup>。また、2015年の空き家総数が893件であったのに対し、2021年には1,761件と900件近くも増加しているのに対して、空き家の登録件数は約100件しか増加していないため、積極的に活用されているとは言えない<sup>7</sup>。

なお、南伊勢町は住宅地のほとんどが漁村にあることから、空き家の大多数は漁村の中に存在しているという現状にある。

(図1) 南伊勢町の水産業就業人口の変化



(出典:「南伊勢町の現状」)

<sup>3</sup> 内閣府ホームページ内「令和3年版高齢社会白書」(内閣府、2021年)  
([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf)) (閲覧日 2022年9月16日)

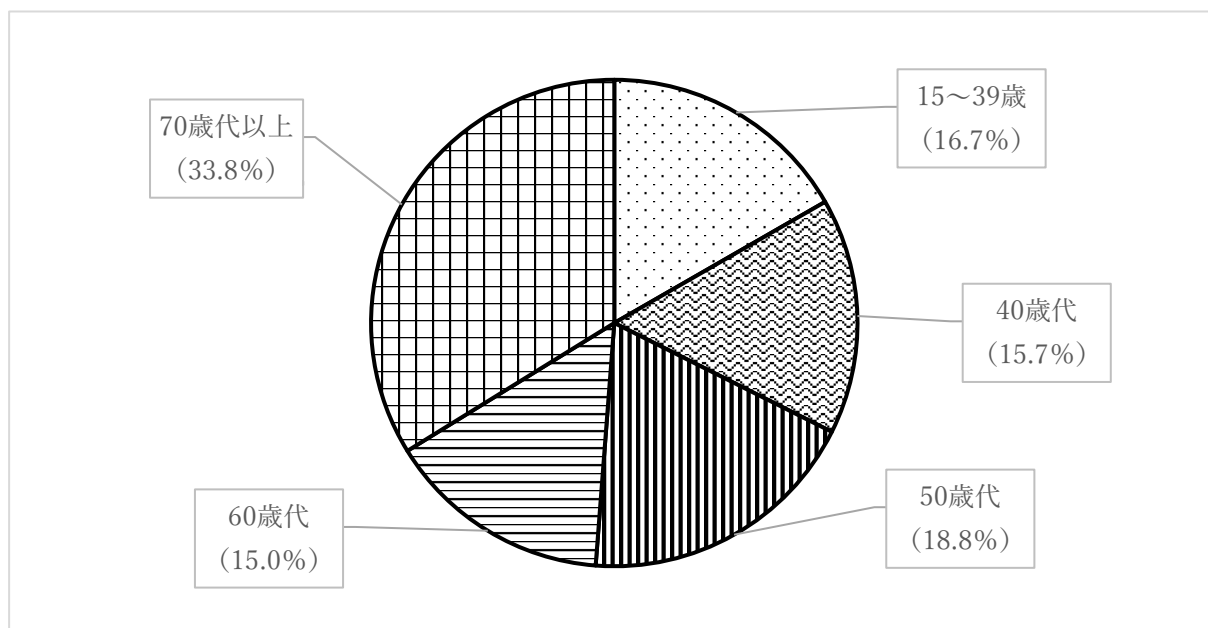
<sup>4</sup> 南伊勢町「南伊勢町の現状」(南伊勢町、2021年)

<sup>5</sup> 農林水産省ホームページ内「2018年漁業センサス報告書」(農林水産省、2018年)  
(<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0001858639>) (閲覧日 10月27日)

<sup>6</sup> 伊勢新聞 2021年10月18日

<sup>7</sup> 南伊勢町 「空き家バンク登録・利用件数(R04.6.30現在)」

(図 2) 南伊勢町の年齢構成別水産業者の割合 (2018 年)



(出典：「漁業センサス」より作成)

### 第 3 章 基本的な考え方

後継者不足に悩む水産業を活性化するためには、どうしたら良いだろうか。ここで私たちは、「今そこにあるもの」を活用する、マイナス要素をプラス要素に転換する「逆転の発想」に立つこととした。

南伊勢町には、恵まれた水産資源とそれを活かした、熟練した技術を有する水産業者の方々がいる。これらの方々には、高齢化の波にのみ込まれつつも、この技術を後世に伝えることができる力がまだ十分にある。

また、近年漁村の中で増加している空き家も比較的状态の良いものを選べば、十分活用の余地がある。私たちはこの2つを有機的に結び付けた施策が考えられないかという観点から検討を行った。

第2章の現状分析で見たとおり、南伊勢町の高齢化率は非常に高くなっており、水産業の後継者も著しく減少していることがわかる。そこで、空き家をリノベーションした施設を後継者育成のために活用し、経験豊富な高齢者の方々に指導者となってもらうことで、超高齢社会をもプラス要素として活かす。このような新たな人材育成により、水産業の後継者不足の解決にも寄与することができる。

以上のような考え方に立って、具体的な政策提言を行うこととする。

## 第 4 章 具体的な政策提言

### 第 1 節 提案

#### (1) 空き家リノベーションコンテストの開催

現在、過疎化により南伊勢町の空き家件数が増加し、問題となっている。また、南伊勢町の一大産業である水産業においても就業人口はピーク時に比べ大きく減少していることから、担い手不足という問題が生じている。そこで、同町が空き家リノベーションコンテストを主催し、過疎化によって生じた空き家をリノベーションする。そして、水産業全般

を活性化させるために、リノベーションした空き家を水産業に関することを学べる拠点とし、様々な形で活用する。これにより、過疎によって生じた空き家をメリットとして活かすことができるほか、水産業の担い手不足の解消につなげることができる。また、単に空き家の引き取り相手を募集するよりもコンテストを開催することで、多くの人に空き家問題や活用することのできる空き家の存在を知ってもらうことができる。

私たちが構想する空き家リノベーションコンテストは、南伊勢町が主催するコンテストである。一定の目的をもった活動拠点というテーマに沿って建築系の学生と設計会社に共同でリノベーションのアイデアを出し合ってもらおう。

募集したアイデアの中から最優秀賞を決定し、受賞したチームの空き家リノベーション案を元に、一定の目的を持った活動拠点として空き家のリノベーション施工を行う。リノベーションの費用については、既存の空き家バンクリフォーム補助金（南伊勢町）を活用する。

学生や設計会社の募集は、同町ホームページに募集サイトの開設、「AKICHIATLAS.com」への掲載、SNS等を利用した宣伝などにより行う。

## （２）「やい気ととキャンパス」の設立

「やい気ととキャンパス」（愛称「ととキャン」）とは、漁師になることを目的とした単なる漁師塾とは異なり、水産業に関わる様々な分野について学ぶことのできる総合的な研修の場である（「やい気」とは、伊勢志摩地域の言葉で「やる気」を意味する。）。「漁師コース」、「養殖コース」、「水産加工コース」、「料理コース」の４つのコースに分かれ、数か月以上の期間、リノベーション済みの空き家を利用して活動する。

指導者として、水産業に携わる現役の方々だけでなく、引退された方々にもご協力いただくことで、研修生は水産業について深く学ぶことができ、超高齢社会をプラス要素として活かすこともできる。研修生は、授業料を支払うが、その後に定住し、かつ水産業に従事する人は、半額返金されるシステムとする。

また、期間中は、空き家において生活するため、物件探しや家賃支払などの負担も軽減される。さらに、研修生は実地研修を行うため、水産業者は、労働力を確保することができる。「やい気ととキャンパス」の日程や場所、応募資格、授業料、募集人数等の詳細は町や後述の「TRITON PROJECT」のホームページに掲載する。SNS等を通じて宣伝し、入校者を募集する。ここで４つのコースを紹介する。

１つ目は、「漁師コース」である。漁師コースでは、漁業者としての基本的なスキルを学ぶ。主な研修内容として、県内水産業の概要、水産生物、漁業制度、海難防止、関係法令の講義や、漁業現場でのまき網、定置網の実習などを行う。加えて、一級・二級小型船舶操縦免許や漁業無線免許といった免許取得の応援を行うなど、漁業者になるための基礎的な知識や漁業技術を学ぶカリキュラムとする。このように、漁師コースを設立することで、研修生が技術や知識を身に付け、次代の担い手となることが期待される。また、授業の一環として実際の漁船に乗ることができれば、研修生は漁師の仕事を肌で感じるだけでなく、漁師の方も労働力を確保することができる。

２つ目は、「養殖コース」である。養殖コースでは、養殖者としての基本的なスキルを学ぶ。主な研修内容として、県内水産業の概要、養殖技術、関係法令の講義や、養殖現場での実習を行うなど、養殖者になるための基礎的な知識や技術を学ぶカリキュラムとする。

このように、養殖コースを設立することで、鯛、アワビ等の養殖の担い手を確保することができ、ブランド養殖魚の取扱拡大につなげることができる。

3つ目は、「水産加工コース」である。水産加工コースでは、加工についての基本的なスキルを学ぶ。主な研修内容として、県内水産業の概要、水産加工の流れ、加工技術や魚のさばき方、関係法令の講義や、仕入れ作業、近隣の水産加工会社との協力による実習を行うなど、加工職になるための基礎的な知識や技術を学ぶカリキュラムとする。このように、水産加工コースを設立することで、南伊勢ブランドであるかつお生節や骨なし串ひものなどを守り続けることができる。また、ブランド養殖魚の加工品開発にもつなげることができると考えられる。

4つ目は、「料理コース」である。料理コースでは、水産物を使用した料理についての基本的なスキルを学ぶ。主な研修内容として、レストラン開業のための資金調達方法や資格・届出、経営戦略の講義や、地場の食材を使った料理のレシピを作り、調理して腕をあげるほか、魚の下処理やさばき方の実習を行うなど、料理人になるための基礎的な知識や技術を学ぶカリキュラムとする。さらに、月に何度か食事会を行い、住民の方々に味わっていただくことで、自分の料理技術の進歩を確かめることができる。このように、料理コースを設立することで、地場の品、新鮮な魚介類を食べることができるレストランが増え、南伊勢町の魚介の魅力が再発見できる郷土料理店として、県内外からの観光客が見込め、水産業がさらに盛り上がることを期待できる。

以上の4つのコースの他にも「やい気ととキャンパス」特別プログラムとして、漁村地域に馴染めるよう、地元行事への参加や、地元の水産業者との意見交換を行うことで、南伊勢町への定住、水産業関係への就業を後押しすることができる。水産業の担い手の方々や地元企業、漁業協同組合の方々の協力を得ながら講義を進めることで次代の担い手を町全体で育て上げることができ、南伊勢町の水産業の盛り上がりにつなげることができる考える。

なお、南伊勢町では水産業の活性化や担い手育成に取り組む一般社団法人「フィッシャーマン・ジャパン」（宮城県）、漁船IoTベンチャー企業「ライトハウス」（福岡県）と連携し、水産業の担い手育成事業「TRITON PROJECT」をスタートさせている。このプロジェクトでは、1泊2日の短期研修と、就職につながる1カ月から2年程度の長期研修がある。この「TRITON PROJECT」と比較すると、私たちの提案は水産業者になるかどうかを考える場とすることができるという点が特長である。「TRITON PROJECT」の短期研修は、気軽に体験することができる一方で、長期研修は、本気で漁師になろうという人向けである。これに対し、「やい気ととキャンパス」は、水産関連産業全体への就職を考える場として、使うことができる。すでに、「TRITON PROJECT」では、町内の事業者に対し、「新規受け入れ先」を募集していることなどから、私たちの提案する「やい気ととキャンパス」とつなげることで、より水産業が発展していくのではないかと考える。

### （3）京都府の「海の民学舎」

ここで、参考事例として、京都府の「海の民学舎」を紹介する。

京都府は、水産業の担い手の減少や高齢化、水産加工業の衰退等が顕著となっており、漁村の集落機能が低下していることから、平成25年度に水産業経営を支える新たな人材育成や漁村における新たなビジネスの起業を進めるために「海の民人育成プラン」が策定

された。この「海の民学舎」の施策として、京都府の水産業の振興と北部地域の活性化に向けて、新たな個人水産業者や水産業経営体の育成、若手水産業者の経営力向上、加工等の漁村ビジネスおこしのリーダーを育成することを目的とした「海の民学舎」が設立された。

「海の民学舎」では、「新規就業者講座」と「経営力向上講座」の2講座を設けている。

「新規就業者講座」では、新規就業者が2年間の研修期間を経て、水産業者としての基本的なスキルを学ぶもので、水産業協同組合などの水産業団体をはじめ、京都府と地元市町が、研修から就業・漁村への定住までをバックアップするカリキュラムである。主な研修内容として、1年目には、基礎研修として水産業の基礎的な知識と技術を習得するために、小型船舶免許や漁業無線免許といった免許の取得、水産業や水産研究のエキスパートによる水産一般、資源管理型水産業、水産生物、水産業制度、海難防止などの講義や水産業現場での定置網、底びき網、トリガイ・イワガキ養殖等の実習を行っている。2年目には、実際に漁村に定住しながら、個別の研修先での現地研修を1年間継続することで、水産業技術の向上に努め、漁村定住の留意事項などを学習する集合研修などに参加し、漁業者になるための更なる知識や漁業技術などを学習するカリキュラムとなっている。

「経営力向上講座」では、若手・中堅水産業者が経営力を高めるために、経営の基本知識を習得するもので、外部から税理士や経営指導員を講師に迎え、適正な申告に向けた帳簿付けの基本や経営計画の作成方法などを学ぶことに加えて、府や漁協の職員とともに、数名のグループで他府県の現場に赴き優良事例を学ぶ先進地事例研修を行っている。

この「海の民学舎」と私たちが提案する「やい気ととキャンパス」との相違点は、私たちの提案の場合、新規水産業者を育成し、水産業経営力を高めるだけでなく、コース別に分けて各々で水産業とその関連産業全般についても学ぶことができることである。

#### **(4) 空き家対策と「やい気ととキャンパス」とのつながり**

なぜ、空き家対策と水産業振興を結びつけるべきなのだろうか。

先に述べたとおり、南伊勢町の場合、空き家の大多数は漁村の中にあるという現状にある。それらの空き家を活用するという事は、そこに住む人の生活まで考えることを意味する。生活を考える場合、その人の生活を支える収入が必要となる。漁村の中で収入を得ることを考える場合、水産業やその関連産業が有力な候補となることはいままでもない。また、空き家リノベーションコンテストと水産業振興の双方からみても両者を合わせて行うことによる積極的価値が認められる。

具体的にいうと、空き家リノベーションコンテストを「やい気ととキャンパス」と合わせて行う積極的価値は、問題となっている空き家の利用が進むという点である。使用目的のはっきりした空き家の活用事業は、PR効果も高く、空き家をリノベーションして使いたいという人を広く呼び込むことができる。

また、「やい気ととキャンパス」を空き家リノベーションコンテストと合わせて行う積極的価値は、過疎地域への移住成功に必要といわれる住まい・仕事・コミュニティを得られるという点である。空き家を活用することで、まず、生活基盤としての住まいを得ることができる。その上で、水産業に就業するための基礎的な知識・技術を身に付けることができ、漁村のコミュニティの一員として水産業に従事することで、漁業権を有する漁業協同組合の組合員となる道も拓ける。

このように、空き家リノベーションコンテストと「やい気ととキャンパス」の両方を結びつけることで、それぞれの事業の効果がより高まることが期待できる。

具体的に両者の事業を結びつける方法として、現行の空き家バンクリフォーム補助金制度に加え、条件付きの融資制度を設けることが考えられる。空き家をリノベーションするには、多額の資金がかかる。そこで、空き家を、「やい気ととキャンパス」をはじめとする水産業の振興に寄与する形で使用することを前提としてリノベーション代金を地元の金融機関が低利で融資を行う。低利融資の原資として、公費で基金を造成し、バックアップを行う。仮に、水産業の振興目的以外で空き家を使用した場合には、債務者が、利息の差額分を一括返金するという条件も付けておく。

なお、今回は、主に水産業について提案したが、この提案は水産業だけでなく、農業など他の第一次産業への応用も可能である。さらに、移住体験施設等をつくることで第三次産業の活性化も図ることが可能だと考えている。

## 第2節 政策のメリット

### (1) 空き家リノベーションコンテスト参加者にとってのメリット

第一に、建築系学生側のメリットとして学生の期間に実務経験を積むことができる。設計会社の方と共同で案を作成していくため、プロの観点からアドバイスを頂きながら、地域の風土や暮らしに根ざした案を作成することができ、普段の学習では得難い実務的な体験ができると考える。加えて、学生はその設計会社とつながりを持つことができるなど、人脈を広げることができる。また、他校の人の作品から自分では思いつかないインスピレーションを得るなど様々な視点を持つことができ、学生にとって新たな刺激を得ることができると思う。

第二に、設計会社側のメリットとして空き家リノベーションコンテストを通して自身の会社の広告ができるとともに知名度向上につなげることができる。最優秀賞を受賞した場合、実際に作成した案で空き家がリノベーションされるため広告として大きな効果をもたらすと考える。仮に受賞できなかった場合でも、町のホームページ等で作成案と会社名を掲示することにより、知名度向上につなげることができると思う。また、若者の育成につなげることができるというメリットもある。今後、建築業界で活躍していく若者に対して、実際に働く側として考え方や経験を伝えることで将来を担う若者の育成につなげることができるのではないかと考える。

第三に、コンテストを通してSDGsへの取り組みにつなげることができる。例えば、使われなくなった空き家のリノベーション事業は12番の「つくる責任 つかう責任」に該当するなどコンテストを通して会社としてSDGsへの取り組みに寄与できるのではないかと考える。

### (2) 「やい気ととキャンパス」参加者にとってのメリット

「やい気ととキャンパス」への参加は水産業に携わりたいと考えている人のきっかけになる。例えば、漁師になる人は身近な人が漁業に携わっている場合がほとんどである。今回提案する漁師コースではそれ以外の人にも漁師という道に入ることを容易にするであろう。また、漁師を目指す人は漁師に弟子入りをすることが一般的であるが、自分一人で漁師に弟子入りを申し出るとは勇気がいることであり、また弟子入りはいつ独り立ちすることができるのかという不安もあることが考えられる。しかしながら、この制度は漁師に



なりたいという気持ちさえあれば、「やい気ととキャンパス」に通うことが可能であり、また行政が関与する就労支援ということで安心できるのではないだろうか。「やい気ととキャンパス」という一定のプログラムの下で行われているため、知識がなく、教えてくれる水産業者が身近にいないとしても漁師を目指すことが可能である。

### (3) 地域にとってのメリット

第一に、「やい気ととキャンパス」という水産業について学べる場を設けることで、担い手不足を解消することができる。担い手不足は少子高齢化が進む日本にとって避けて通ることのできない深刻な問題である。特に、水産業就業者は全国的にみても著しく減少しており、南伊勢町の水産業に携わる人の数も大幅に減少している。しかしながら、水産業に興味関心を持つ者は少なからず存在する。今回提案する施策によって、その人たちに水産業に触れる機会を実際に与えることで、興味があるだけで終わってしまっていた人を実際に就業までサポートすることができるのではないかと考える。

第二に、過疎化を緩和することができる。都市圏への人口流出によって多くの地方では人口減少による過疎化が進んでいる。過疎化は働き口の減少や耕作放棄地の増大、住宅の老朽化、空き家の増加など様々な問題発生の原因になる。今回提案した施策は全国初の試みであるため、南伊勢町の知名度が飛躍的に上がるのではないかと考えられる。知名度が上がることによって南伊勢町に興味を持ち、南伊勢町に観光に来ていただけるのではないだろうか。他県から観光客が来ることによって南伊勢町の観光収入が増え、その収入をより住みやすく、より観光しやすくすることに使うことで地域を活性化することに繋がるのではないかと考える。

第三に、税収が増加することにより住民サービスを拡充することができる。これは現在南伊勢町で暮らしており、支えてもらっている住民の方々へのわかりやすい効果であろう。仮に南伊勢町に興味を持ち移住を検討している人がいたとしても、そこで行われている住民サービスが十分なものでなければ移住を断念されてしまう可能性もある。そうした懸念を払拭するためにも、よりよい住民サービスの提供が可能になるようにしていく必要がある。この政策がそのための財源となるのではないかと考えられる。

第四に、住民同士の絆の形成に役立つことである。現在は水産業の衰退が大きいと考えられるため、「やい気ととキャンパス」を提案したが、その時々状況に応じた南伊勢町の方々が欲しているものを作ることで住民にとってより住みやすい町を作ることができるであろう。例えば、住民が交流できるようなスペースを作り出すこともできる。少子高齢化や核家族化の進行など社会環境の変化に伴う生活様式の多様化や地域に対する考え方の違いなどにより、地域活動に参加しない人や地域の関わりを持とうとしない人が多くなっており、住民同士の連帯感や繋がり希薄化が多くみられている。しかしながら、南海トラフ地震などの災害の発生可能性があるといわれている現在、災害時の助け合いや、子どもや高齢者の見守りなどには地域の人々の繋がりが重要ではないだろうか。そのために、地域住民が互いに信頼関係を生み出せるような交流スペースを作ることも可能であると考えられる。

## 第3節 政策を進めていく上での課題と対応策

### (1) 空き家リノベーションコンテストに参加してくれる学生がいるか

まず、空き家コンテストに参加してくれる建築系学生がいるかという課題がある。

この点については、既に鹿児島県等、他の自治体が開催しており、そこには実際に参加する学生がいる。このことからわかるように、南伊勢町による空き家リノベーションコンテストも成り立つのではないかと考える。しかし、参加してもらうにはそもそも人に知ってもらわなければならないため、前提として十分な宣伝が必要である。

### **(2) 「やい気ととキャンパス」に入校してくれる人がいるか**

次に、「やい気ととキャンパス」に入校してくれる人がいるかという課題がある。

この点については、空き家リノベーションコンテストとセットで行うため、一定の広告・宣伝効果があると考えられる。「やい気ととキャンパス」に活用することを目的とした空き家リノベーションコンテストの開催を、ホームページやSNS等で宣伝することで、「やい気ととキャンパス」という事業の存在を知ってもらう手段にもなり得、そこから南伊勢町の魅力を知ることになれば、さらに外部から人を集めることができると考える。加えて、元から水産業に関心がある人だけでなく、より多くの人に広く知ってもらうこともできる。

### **(3) 本当に南伊勢町の高齢者の方々に指導者となっていただけか**

空き家リノベーションコンテストによって水産業の振興のための活動拠点を作ったのはいいものの南伊勢町の高齢者の方々が本当に指導者となって水産業活性化のために力を貸していただけるかという課題もある。

この点については、水産業担い手育成事業「TRITON PROJECT」をスタートさせ、実際に受け入れ、指導を行っている方々を中心として力をお貸しいただくことができると考える。そうすることで、さらなる水産業の活性化に繋がり、そして2次・3次と連鎖的な産業の活性化も期待できると考える。

## **第5章 おわりに**

今回の提案は、産業の活性化という問題をすぐに解決できるような効果が出るものではないが、長期的にみれば「やい気ととキャンパス」を通じて後継者不足という側面を解消でき、ひいては水産業の活性化につながるものである。

いうまでもなく、南伊勢町にとって水産業はなくてはならない産業であり、実際に、町では担い手育成事業をスタートさせている。しかし、現在の流通経路では、市場に水揚げされた魚は鮮魚のまま買われて南伊勢町から離れていってしまうことがほとんどであるため、水産加工や消費なども含めた6次産業化も必要になってくると考える。

さらに、「やい気ととキャンパス」を通じて、町の経済の循環を絶やさないために、どのように水産業を発展させていくのか、南伊勢町の水産業のあり方を外部からの新たな人材と元々の住民とで地域一丸となって模索していくことのできる関係を築く。そうすることで、南伊勢町に「イイ波」を呼び込み、町のさらなる発展につながるものと考えている。

〈参考文献〉

伊勢新聞 2021年10月18日

水産庁「令和3年度水産白書」(水産庁、2021年)

(<https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/R3/attach/pdf/220603-11.pdf>) (閲覧日 2022年9月16日)

総務省統計局「令和2年国勢調査」

内閣府ホームページ内「令和3年版高齢社会白書」(内閣府、2021年)

([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s\\_01.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf)) (閲覧日 2022年9月16日)

農林水産省東海農政局「東海農林水産統計年報」

(<https://www.maff.go.jp/tokai/tokei/nenpo/index.html>) (閲覧日 2022年9月16日)

農林水産省ホームページ内「2018年漁業センサス報告書」(農林水産省、2018年)

(<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0001858639>) (閲覧日 10月27日)

南伊勢町「空き家バンク登録・利用件数 (R04.6.30現在)」

南伊勢町「南伊勢町の現状」(南伊勢町、2021年)

南伊勢町ホームページ内「数字でみる南伊勢町」(南伊勢町、2019年)